天皇帰一国家をめざす聖徳太子と、蘇我独裁を目論む馬子とのバトルが始まった。そして遂に政争の犠牲者が…。

なにわの シリーズ 歴史紀行

上宮王家の悲劇

その6 日出ずる国の天子（前編）

―― 冠位十二階の制定 ――

Aブロック担当　副会頭
「輝くなにわ」編集委員長 野瀬 泰良
（霊園経営者）

法起（ほうき）寺（生駒郡斑鳩町）

太子創建七寺のひとつであり、もとは蘇我刀自古夫人とその3人の御子達が住んだ太子本宅とも云うべき岡本宮であった。今に残る三重塔は創建当時のものと伝えられる。太子はここに群臣を集め、度々大乗仏典の講義をなされた。

推古天皇の不本意な対新羅宣戦

西暦600年の遣隋使は、120年ぶりに中国大陸へ国威高揚を見せつける快挙の筈が、なぜか国民には一切言及せぬよう朝廷から厳しく咎められていた。その翌年には大王（天皇）家と蘇我氏の密月が突然壊れるかのように、小墾田宮（おはりだのみや　小治田宮とも書く）と称する新しい政庁の建設が始まり、加えて太子が制度改革の拠点となされる斑鳩宮（いかるがのみや）の建設までもが始まった。それを知った大臣の馬子は、飼い犬に腕を咬まれたとばかりに怒り狂い、呼びつけた長男の蝦夷（えみし）に当たり散らすのだった。

「何故儂（わし）がかくも避けられるのだ。大昔のワカタケル大王（雄略天皇）の御代より久しく絶えてなかったシナの王朝との接触を再開してやったのはこの儂だぞ。倭国について隋の皇帝から何のお咎めも無く、使いたちは無事に勤めを果たして帰ってきたのじゃ。ならば儂は称えられてしかるべきではないのか。」

「恐れながら、お言葉が過ぎましょう。上宮太子におかれては、我国が隋から侮辱されたのですから、この遣使は失敗であったと仰せなのです。隋帝国や半島三国と比べるなら、我が国には中央政府というべきものがない、だから早急に中央政府を構成し、行政を専らとする官僚たちを集めねばならぬ、そして異国と対等に外交ができる有能な人材の養成を急がねばならぬと仰せなのです。」

「それこそ、太子の戯言（たわごと）なのじゃ。異国との事は、その力に屈服するか、こちらの力で捻じ伏せるか、そのいずれかなのじゃ。それを外交なぞと。ヒヨコの官僚たちをいくら集めても、常に侵略を伺う異国には立ち向かえぬぞ。」

「外交こそが異国との無益な戦争を排除する唯一の手段だと太子はおっしゃるのです。」

「やはりお前までもが、そんな世迷い事に傾倒していたのか。お前がそんなだから蘇我家の行く末を考えると、弟の摩理勢に境部家を継がせたのを後悔するのだ。ようし、太子には思い知らせてやろう。戦争だ。蝦夷よ、かくなる上は戦争だ。」

「父上、まさか太子ご一族を相手に…」

「愚か者、あんな若造一人ひねり倒すのに兵などいらぬ。戦争するのは新羅（しらぎ　シンラ）とじゃ。隋の皇帝に舐められたのなら、かえって好都合。隋が油断している隙に軍を集めて密かに玄界灘を渡らせ、半島を侵すのじゃ。任那（みまな　倭人による半島南端の伽耶地方の呼び名。倭人の祖先、弥生人の出身地か）を取り戻す好機ぞ。いいか、任那を奪還するは戦であって、外交などではなかったと太子に思い知らせてやるのじゃ。」

馬子は民族の悲願である任那奪還を大義名分にして新羅討伐を推古天皇に上奉した。派兵の前に半島侵略の真意を説明するため、高句麗、百済の両国に急使が遣わされた。そして11月、天皇は群臣たちに押し切られる形で遂に新羅に宣戦を布告された。上宮（聖徳）太子はこの身勝手な戦争に強く反対されたが、それに耳を傾ける群臣はいなかった。

飛鳥のシンデレラ、膳部郎女妃（かしわでのいらつめ）の登場

狡猾な馬子の上宮（聖徳）太子失脚を狙う戦略はこうである。太子には、来目（くめ）皇子と当麻（たぎま）皇子という二人の弟がおられた。大臣馬子が新羅討伐の将軍に任じたのは、なんと来目皇子様であった。馬子はこう考えた。もし首尾良く任那を奪還できたなら、戦争に反対した太子は国賊として失脚である。逆に我が軍が新羅に破れたなら、その責めを将軍と連帯してとらねばならぬ太子はやはり失脚である。馬子は自らの知略に酔いしれる思いで高笑いをした。だが太子失脚を企てる水も漏らさぬ計略が、やがては自分自身を窮地に追い詰めることになろうとは、神ならぬ馬子は知る由もなかった。

翌602年2月、太子の弟君、来目皇子は撃新羅将軍に任じられ、4月には2万5千の国軍を率いて筑紫に着陣された。だがそんな馬子の思惑を知ってか知らぬか、皇子将軍は何ヶ月経っても自らの健康が優れないのを理由に兵らに渡海を許されなかったのである。

法輪寺（生駒郡斑鳩町）

梅原猛氏によれば、この地に太子が身分の壁を越えて愛した膳部郎女ことホキキミを住まわせた三井宮があった。彼女は太子との間に8人の子をなすほど、生涯太子を熱愛した。太子臨終の前日、共に葬って欲しいと遺言して彼女もまた息をひきとった話は有名である。

新羅との戦が具体化しなければ、馬子のあてが外れることになる。それでも太子失脚を諦めきれない馬子の耳に、太子の品行について眉をしかめる噂話が聞こえてきた。このような不埒（ふらち）な醜態をお知りになれば、天皇は必ずや太子解任を決意なさるだろう。馬子は小躍りしながら豊浦宮（とゆらのみや）に昇殿し、天皇に聞いたまま報告申し上げた。

「陛下には何とお詫びしたら良いか、この馬子はとんでもない人物を摂政の太子に推挙してしまったようでござる。実は太子は陛下から命じられた飛鳥の橘寺だけは、実に念を入れ、時を重ねて建築なされ、それも竣工したというのに今でもしばしば通っていらっしゃる。どうもおかしいと思ったら、それもそのはず、太子はその道中であろうことか、菜を摘む農夫の娘が突き出す大きな尻か、その桃色のふくらはぎにでも恋情を…」

「これ、大臣殿。ここをどこと心得る。」

「これは女帝陛下の前で、馬子としたことがとんだはしたないことを。否はしたないのは太子の方でござるよ。それは、それは、熱心に橘寺に出かけるのも、その下賤な娘との逢瀬が目的だったようで、しかもその百姓女を遂に孕ませたとの噂でござる。そのことで太子の斑鳩宮への転居まで、ずるずる遅れているとのこと。その娘の名は、」

「ホキキミであろう」と女帝は高笑いしながら馬子の下品な口を封じられた。

「そのことなら知りおるところじゃ。大臣殿の話とはちと違うがのう。ホキキミはのう、あれは農夫の娘などではなく、あれはの、そう膳部傾子（かしわでのかたぶこ）の娘なのじゃ。斑鳩に新宮殿が出来上がる日には、膳部郎女と称して太子に目出度く嫁ぐことになっておる。見たところ教養もある良い娘じゃ、大臣殿、この豊御食炊屋媛（とよみけかしきやひめ）直属の膳部家（推古天皇は皇后のとき、膳部一族とともに朝廷の食糧を調達する職務にあったらしい）の娘が嫁入り前に子を孕んだなどと聞き捨てならぬ戯言（ざれごと）ぞ。そのような不埒な噂を大臣殿が無責任に撒き散らすなら、断じて許しませぬぞ。」

太子の弟、来目皇子不審死の波紋

戦争には多大な戦費が要る。たとえ相手に戦を仕掛けられても、負けた方がその両者の戦費を賄い、総てを失うのが、太古の昔から第二次大戦に至るまで世界の常識であった。だから勝敗を決せず、海を挟んで敵国と対峙するなど、いつまでも続けられるものではない。この戦争に断固反対を唱えられる太子は筑紫の来目将軍に、兵を決して渡海させぬようにと、お手紙を何度も送られていた。 将軍からはその都度、「大臣殿からは今すぐにも海を渡れと矢のような催促が来ておりますし、戦利品で戦費を賄いたい兵らは今にも暴発しそうで、とても私ひとりでは抑えられません」と悲鳴ともとれるお返事がきていた。

やがて年が明けて603年の2月、筑紫から突然、来目将軍の病死を伝える知らせが入った。当初は一向に戦いをなさらない将軍に遂に怒りを爆発させた兵らによって、将軍のお命が奪われたのかと憶測されたが、次第に最期のご様子が明らかになって、主戦論者の誰かの指示によって毒殺されたのかもしれないとの噂が都を覆うようになった。たとえ戦地で死すとも、皇族の遺体は殯（もがり）を済ませて都に持ち帰るのが習いである。殯の儀式とは、何日も遺体に熱湯を浴びせ、腐肉を流して綺麗な白骨にすることだ。必ず骨に跡が残るから斬殺しておいてそ

れを内緒にはできない。だから人は他殺ならば毒殺だろうと無責任に言ったのだ。上宮（聖徳）太子は悲しみのあまり、三日三晩泣き明かされた。

推古天皇まで将軍暗殺はあり得ることだと怪しまれた。天皇は大臣馬子を豊浦宮に呼びつけ、本件の真相を厳しく詰問された。馬子はこれまでも皇族を弑殺（しいさつ）し、（崇峻）天皇の暗殺にも加担したからである。それに対し、馬子は、来目将軍は意に沿わない人物だったが、それでも自分は将軍には一切手を出さなかったと弁明した。そして次のように申し述べた。

「成る程、私は臣の身ながら主である皇族の方々を殺めました。しかし臣であるからこそ、その総てについて事前に陛下のご許可を頂戴してきたのでござる。」

そう言われても、天皇は俄（にわ）かにお信じにはなれなかった。陛下の知られぬ処で、そ知らぬ顔で勝手なことをしているのではないかとお疑いだったのだ。女帝の脳裏を掠めたのは、昔々の後宮での出来事だ。まだ若くして病死なされた石媛（欽明帝）皇后のこと、そして即位の直後に病死なされた広媛（敏達帝初めの）皇后のことである。

（石媛様薨去によって、大王の一夫人たる母が後宮の支配者となった。そして広媛様薨去によって私が皇后になれた。伯父のあなたもそれによって天下を得られた。あなたがいくらそ知らぬ顔をされても、あなたを除いて誰にそんなことができようか。）

「馬子よ、今は汝（いまし）の顔を見たくもない。暫くは昇殿せずとも良い。汝が潔白だと言うのなら、なおさら素直に従え。」

太子による冠位十二階の制定

愛する弟を失い、悲しみに拉（ひし）がれる太子を王宮に呼び寄せ、推古天皇は次のようにおっしゃって励まされた。

「太子よ、いつまでも悲しみに浸っていてはなりませぬ。大臣馬子が昇殿せぬこの期を逃してはならぬ。今こそ国政改革を始める好機ぞ。それが尊い命を犠牲にしたそなたの弟、来目の本望ではあるまいか。」

かくして天皇の命により、上宮（聖徳）太子の周りに若い群臣たちが集められ、新しい国の政府機構をつくる準備作業が始まった。

一方、新羅征討将軍の後任には、太子の末の弟、当麻（たぎま）皇子様が選ばれた。皇子は7月になってようやく戦地に向け出発されたが、道中の明石で随行した妻が病いで亡くなると、その葬儀を口実にさっさと大和に引き返されてしまった。ここが潮時と判断されたか、天皇は遂に新羅攻撃中止の命を発せられた。

そして10月、推古天皇は豊浦宮から新しい小墾田（おはりた）宮に移られた。新しい王宮の竣工に挨拶にも伺わず、意地になった様に私邸に篭もる馬子を、長男の蝦夷（えみし）が訪ねてきた。

「父上はまだ謹慎が解けないのですか。」

「何をぬかすぞ、儂（わし）がいなければ、政事（まつりごと）のいの字も始まらぬことを思い知らせてやるのじゃ。だから請われても昇殿せぬぞ。太子の様子はどうじゃ。さぞ困っておるじゃろうて。」

「いいえ父上、太子はいよいよ意気盛んに行政改革を始められましたぞ。この国の行政を任せる官僚にするために、生まれた身分によらず、能力や人物を見て、幅広く人材を集めようとなさっておられます。そしてその人の能力に応じて十二段階に分けた官位が与えられるのです。その官位に付帯し頭に被る冠の色までが決められておりますので、官位を冠の位と言い換え、冠位十二階の制と言うのだそうです。」

「どうせ、隋か高句麗の猿真似であろうが。」

「いいえ、聞くところ太子が独創的に創られたようです。この冠位は徳の五行と言うべき五項目を、太子が重要に思われる順に仁、礼、信、義、智と並べ、その上に総称たる徳を載せ、この六つの位の前に大、小を付け、上下に分けて十二階となされたとの由、つまり公僕たる官僚は、その冠を見るたびに仁、礼、信、義、智の徳を磨くこと、努々（ゆめゆめ）怠るべからず、と日々論（さと）される訳ですよ。」

「ふーむ、では大徳が最高位という訳か。ならば聞くまでもないだろうが、この儂は当然、大徳の冠を被るのじゃな。」

「いや、それは…」

「まさか、大徳ではないと。この大臣の儂がか。では儂は誰の下だと言うのじゃ。」

「実は父上は十二階のいずれの冠位にも入っておりませぬ。」

「な、なんと。おのれ、あの青二才が。儂が昇殿できぬのを良いことに何たることじゃ。かくなる上は大王様に真意を糾さなければならぬのに昇殿が叶わぬとは。」

（次号に続く）

次回の予告⑦日出ずる国の天子　後編ー憲法十七条ー

蘇我馬子を敵に回して太子の「官僚による政府」つくりは進むのか。朝鮮三国がすべて隋の朝貢国となる中で、倭国だけが隋と対等に外交ができたのか。そして来目皇子や二人の皇后は果たして本当に病死だったのか、それとも他殺なのかの謎にも迫ってみましょう。